

ゆきぎのみち

日本古神
道研究会

皇紀二六六三年十月四日 横浜定例講演会より

『八幡様の謎(二)』

それでは、神漏岐・神漏美大神様のお言葉の続きを申し上げます。前回は、「何故に前後二つ造りになっているのか、意味わからぬであろうが」というところでおわっていただきましたね。

一の殿の前の方は応神じゃが、後ろはわれらの鎮座する所ぞ。

二の殿は宗像の比売三神となしたゆえ、宗像の三比売が困りおるぞ。この殿の前に鎮座なすは、宗像の三比売ではのうて、**応神(天皇)**が妻・**品陀真若王**の娘の三柱の女王ぞ。高木之入日売、中
日売、弟日売じゃ。

応神(天皇)は、三比売ともに妻としたのじゃ。それ故、後の世の者が、これを宗像の三比売と違えたのじゃ。早う正してやれ。応神(天皇)もその名品陀和氣と申したによつて、義父と紛らわしいがの。後ろの殿は、わが娘まこと比売大神ぞ。

三の殿の前の方は、神功皇后じゃが、後ろの殿はまことの八幡大神ぞ。われが比売大神に授けし御子じゃ。

八幡宇佐宮御託宣集 (鎌倉時代)



宇佐神宮発行『宇佐神宮』より

よいか。それ故に、前後二つ屋根造りとなっておるのじゃ。われらが宇宙へ出かけた故、比売(大神)と八幡(大神)を残したのじゃ。われおらぬ故、また、このこと秘しておいた故、現世の者わからずま参りしもやむを得ぬところあるが、今よりはわれらがことも正すがよい。

比売(大神)も、八幡(大神)も、われらの鎮座する場所として、古より前後二つ屋根造りとなして、われらの帰還を心より待ち望んでおったのじゃ。われらも品陀和気も、前は前、後は後としてともに身の内の者ぞ。二つ屋根造りの意味伝えるとともに、祭神の誤りも正せ。応神(天皇)が妻・三比売には、現世の者の誤解とは申せ、長い間、日陰者の如く淋しい思いをさせたな。これよりは、まこと身の内の者として過ごすがよい。宗像の三比売にも、済まぬことであつた。

八幡(大神)が、手向山八幡に移座した時も、都が平城から平安に遷るや、再び男山(石清水)八幡宮に移座した時も、比売(大神)が、「われ、この地を移座することを得ず」と申して、幼き八幡を手放したのも、宇宙の神を補佐する役目として、宇佐の地よりわれに伺い尋ね、祈願せねばならなかつた故ぞ。古の神示が、多く宇佐よりなされた意味もわかるであらう。

石清水八幡が第二の宗廟と言われるのも、宇佐同様、三つの殿が前後に分れ、比売(大神)が宇佐にとどまったのに対し、八幡(大神)がこの地に鎮座して、都を守つた故ぞ。

後の世に、源家の者がこの地を縁とし、義家がこの御社にて元服なせしにより八幡太郎義家と名乗り、八幡の加護受けし恩義未

だ忘れず、今もつて八幡(大神)が元で、われらの警護の任に就いておる。

三つの殿や前後に分れし御社としての八幡造りでなき全国の八幡社も、このことよく心得て、これよりはわれらが共にいるものと思つて、心して社前に立つがよい。』
と、このように大神様は申されたのです。

以上を要約すると、宇宙の神を補佐するという意味で『宇佐』という地名になり、前の殿には応神天皇のご家族が、後の殿には大宇宙の創造神である神漏岐・神漏美大神様のご家族が鎮座になられていのです。

神漏岐・神漏美大神様が宇宙へお出かけになられ、大宇宙と地球の交信のために比売大神様が宇宙の神様を補佐する役目として宇佐に残られ、そのお子様の八幡大神様は後に手向山八幡、さらに石清水八幡宮の方へ行かれて都を守護されたのです。

また、前の殿は、別の所で天照大神様と宗像三比売様が交信されていたのを、まさか大宇宙の創造神である神漏岐・神漏美大神様と比売大神様が交信なさられているとは思われないものですか、宗像三比売様のご交信されているものと思ひ込んで、ご祭神とされるようになったものと思われまふ。しかし昔はこうした神様同士のご交信を見える人がいたということです。

前の殿は応神天皇様のご家族、後の殿は大神様のご家族であり、しかもこうした前の殿、後の殿のある御社だけでなく、八幡社には大神様もいらつしやるという思いで参拝されるとよろしいので

す。特に宇佐八幡宮、石清水八幡宮は、先月号にも載せた通り、一の殿、二の殿、三の殿と分かれ、後ろの殿に大神様のご鎮座の所もあるのですから大変に尊いお社なのです。「御祭神を正せ」という部分と共に今後は正しい参拝をするようにして下さい。

日本の歴史の中でも宇宙の神を補佐する「宇佐」八幡宮が、大宇宙との交信、とりわけ天皇様のご即位のことなど、国にとって大切なことのお伺いの場となっております有名な話があります。

これは第四十八代の称徳天皇様の時代のお話です。この方は女帝で、坊さんであった弓削道鏡という方と親しくなり、道教も自分が天皇になりたいという大それた野心を抱いてしまいました。そして、宇佐より「道教を天皇に」というお告げが出たという話をまことしやかに流します。

今までに例のないことであり、天皇様の跡目という大切なことですので、それを和氣清麻呂公にもう一度聞きに行かせました。その時に「わが国は開闢このかた君臣のことに定まれり。臣をもつて君とする、いまだ、これあらず。天つ日嗣は、必ず皇緒を立てよ。無道の人にはよろしく早く掃除をすべし」とご託宣を受けてきました。これは生まれながらにして皇位継承者というものは決まっているのであって、臣がなることは出来ない。天皇のそばにそなたを置いてはならない。早々に遠ざけなさいという事で、はつきり言ったものですから、道鏡の怒りをもってそのご託宣を出した神主も追放され、和氣清麻呂公は大隈半島へ流されることになってしまいました。

和氣清麻呂公は追放された時には、清麻呂ではなく、それこそ汚れ麻呂であるとか、あるいは汚な麻呂であるといろいろ言われます。お姉さんは広虫という名前なのですけれども、「狭虫」などと言われて、散々悪態をつかれたのです。

道教は清麻呂公を大隈半島へ流しただけではまだ気が済まぬというところで追つ手を差し向け、清麻呂公を殺そうとしました。そのとき猪が出てきてこれを護ってくれたというので京都の護王神社では猪が眷属としての守り神となっています。普通は八幡様は狛犬さん、お稲荷さんは狐です。和氣清麻呂公の護王神社は猪になっております。それぞれ縁のあるそういうものが護っているという形をとるわけです。

大隈半島に流される途中で、はからずも和氣清麻呂公は幣立皇大神宮に参拝をしています。ここは大宇宙の最高神の神漏岐・神漏美の大神様や地球最高神の天御中主神様などがお祀りされているお社で、その時を境に反対に道鏡の方が失脚して下野（栃木）の方へ流されるということになりました。それで和氣清麻呂公は逆に呼び戻されたのです。



和氣清麻呂公の像